

集合的記憶の構築過程に関するジャーナリズム論的考察

アジア・太平洋戦争の記憶を事例として

【要約】

佐藤信吾

本論文ではジャーナリズム論と集合的記憶論を架橋することで、ジャーナリズム実践による記憶の構築過程を理論的に明らかにするとともに、この理論的な検討で得られた知見を「八月ジャーナリズム」によるアジア・太平洋戦争の記憶の構築過程の分析へと応用した。

第一部（第一章から第三章）ではジャーナリズム実践に着目して、ニュースの生産を通じた記憶の構築過程を考察した。ジャーナリズムは組織的・制度的・社会的な要因に規定されながら国民的記憶を構築する実践であると同時に、個々のジャーナリストによる主体的で構築的な記憶実践でもある。この両側面を明らかにするために、このパートではジャーナリズム論と記憶の社会学の先行研究を踏まえて、コメモレイションを中心に理論的な検討を行った。

第一部の検討を踏まえて、第二部（第四章から第七章）では日本のニュースメディアとアジア・太平洋戦争の記憶の関係を論じた。8月15日の「終戦の日」を「頂点」とする日本のニュース文化の中では、8月を「戦争の季節」とする認識が広がっている。この認識に規定された「八月ジャーナリズム」に焦点を当て、ニュースの生産を通じたアジア・太平洋戦争の記憶の構築過程を分析した。以下では各章の内容の要約と全体の流れを示す。

第一部：ジャーナリズム実践と集合的記憶

第一章：メディア記憶論の現代的展開とメディア実践

第一章では、21世紀に入って盛んに論じられるようになったメディア記憶論をメディア実践という観点から発展させる意義を説明した。国民国家やエスニック集団、グローバルな

政治的主体による記憶の構築と利用への社会的な関心が高まった 1990 年代は、「記憶ブーム」の時代と呼ばれる (Huyssen 1995: Introduction 参照)。この時代に再評価されたのが、モーリス・アルヴァックス ([1925]2018; [1950]1989) が創始した集合的記憶論である (Erl 2008: 7-8)。個人主義的な記憶論からも単一の「歴史」からも距離を取る集合的記憶論は、多層的な集団の現在の政治的な関心や目的に沿って記憶を構築する状況を批判的に考察することを可能にした。つまり「記憶ブーム」による集合的記憶論の再評価は、記憶の政治性への関心と結びついていた。

また新聞やテレビといった伝統的なマス・メディア、映画やマンガなどのポピュラー・メディアだけでなく、インターネットや携帯電話といったパーソナル・メディアが普及した 1990 年代後半になると、「歴史の危機」という標語とともにメディア環境の変化を視野に入れた歴史学が求められるようになり、歴史学とメディア論の接近が進んだ (モーリス=スズキ [2004]2014: 3-32)。とりわけメディア横断的な過去のイメージの広がり进行分析する必要から、「過去」や「歴史」を対象とするメディア論はメディア・テクノロジーとメディア・テキストに関する議論を積み重ねてきた。

この「記憶ブーム」による集合的記憶論の再評価と「歴史」を対象としたメディア論の興隆が接合する形で、21 世紀初頭から盛んになったのが「メディアによって、メディアを利用して、メディアについて語られる集合的な過去」を体系的に探究するメディア記憶論である (Neiger et al. 2011: 1-8)。こうした背景から、メディア記憶論は記憶の政治性、記憶とテクノロジーの関係、テキストの表象の分析という三つの方向性を中心に発展した。ただし従来のメディア記憶論は、メディア記憶を構築する人々の社会的な「実践 (practice)」への関心が相対的に希薄だったと言える。なお本論文における「実践」の定義は、「社会的な構成と慣習の圏域」から出発しつつ、行為者の〈自由〉によって変化する行為の総体である (田辺 2003: 序章; 247-251 参照)。

そこで第一章では、集合的記憶論が想起や語りといった行為を社会的に規定された記憶実践とみなしてきたことを確認した (アルヴァックス [1925]2018: 363-365)。たとえばジェームズ・ワーチ (Wertsch 2002: 60-62) は「物語の組織化」という概念を用いて、物語られる「具体的な情報」の多様性にも関わらず、記憶が「図式化された物語のテンプレート」に沿って一定の流れに収斂することを指摘した。そして社会的に規定された記憶実践という視座をメディア記憶論に導入するために、ニック・クドリー ([2012]2018) のメディア実践論を検討した。メディア記憶はメディア環境に規定されながらメディアを「活用」する

人々の社会的実践によって構築されるものであり、結果として「メディアの中にある」記憶だけが社会的に想起されたものであり、「メディアの中にあるもの」は忘却されたものとする認識が固定化していく。こうして多様な集合的記憶の中でも、メディア記憶を中心とみなす記憶の社会的な秩序化が促進されるところに、メディア実践によるメディア記憶の構築の特徴がある。

第二章：ジャーナリズム実践による国民的記憶の構築

第二章では、メディア実践の中でもニュースを生産するジャーナリズム実践に焦点を当てた。まず伝統的なジャーナリズム論が、ニュースの生産過程を規定する組織的・制度的・社会的な要因を分析してきたことを示した (Schudson 2019)。たとえばゲイ・タックマン ([1978]1991: 23-37) は、ニュースメディアがジャーナリストをあらかじめ「重要な出来事が起きそうなところ」に配置するという「集中化」を行うことで、「ニュース網」が作り上げられることを指摘した。また数多くの出来事の中からニュースになるものを迅速に選択する必要があるジャーナリストは、ニュース文化の中に「知識」として浸透した「ニュース・バリュー」を基準に出来事を判断する (Allan 2010: 71-72 参照)。こうした概念を用いることで、ジャーナリズム論はニュースを大量に生産するという組織的な要請がジャーナリストの物理的・社会的な配置に影響を与えるだけでなく、ニュース・バリューとしてジャーナリストの価値判断に浸透していると想定し、ニュースの内容や対象が画一化していく理由を論じてきた。

しかしジャーナリズムは出来事とニュースの双方を「いまーここ」に固定する現在主義に依拠して理解されることが多く、ジャーナリズム論では時間性への問いが後景化してきた (Zelizer 2021)。この点を重視したジャーナリズム記憶論は、過去の出来事をニュースとして報じることで、ジャーナリストの正当性や権威を高めるような物語が生産されてきたことを指摘する方向性 (Zelizer 1992; Schudson 1992) と、コメモレイションやアニバーサリーといった現在主義に立脚するジャーナリストが「過去を記念するために日常業務を中断」する「稀有な機会」を分析する方向性 (Edy 1999: 74-77; Kitch 2002; Meyers 2021: 1682) からの理論的な検討を深めてきた。ジャーナリズム実践を規定する社会的な要因を重視する本論文は、後者のコメモラティブ・ジャーナリズム論やアニバーサリー・ジャーナ

リズム論と同様の関心を抱いている。ただし従来はコメモレイションにおけるニュース・テキストの内容や表象の分析が重視されており、コメモレイションに規定されながらニュースを生産するジャーナリズム実践への関心が希薄だった。

この問題点を乗り越えるために、第二章ではピエール・ノラ（[1984]2002; [1992]2003）の「記憶の場」を参照しながら、人々の記憶実践がコメモレイションに「象徴的なオーラ」を付与する一方で、コメモレイションによって記憶実践が規定されるという相互作用を論じた。この記憶実践の一形態としてジャーナリズム実践を捉えることで、ジャーナリズムとコメモレイションの相互作用を論じる視座が得られた。現在主義に規定されるジャーナリストにとって「稀有な機会」となるコメモレイションは、国民的記憶を構築するジャーナリズム実践を導く一方で、ジャーナリズム実践が蓄積することでコメモレイションがメディア・イベントとして「象徴的なオーラ」を帯びることを論じた。

第三章：構築的な実践の担い手としてのジャーナリスト

第二章は特定の過去の出来事を国民的記憶として構築するジャーナリズム実践が、ニュースメディアやコメモレイションに規定されるという組織的・制度的な側面を強調する議論を展開した。ただしジャーナリズム実践を組織的に捉える議論だけでは、個々のジャーナリストの主体性は見えてこない。そこで第三章では、ニュースメディアに所属するジャーナリストが主体的で構築的な実践に従事している点に着目した。まずニュースルーム中心主義や客観報道パラダイムといった伝統的なジャーナリズム論の見方を批判的に検討し、こうした見方がジャーナリズム実践における個々のジャーナリストの主体性を見えにくくしてきたことを指摘した。そして、ニュー・ジャーナリズム運動に立脚した玉木明（1996）の思想の再評価を通じて、ニュースメディアに所属するジャーナリストを〈世界〉と対峙する〈一人称＝わたし〉として捉える意義を説明した。

そしてジャーナリストの主体性と集合的記憶の構築過程を結びつけるために、第三章では想起と忘却の循環を構築的な実践という観点から捉える文化的記憶論を検討した。特にアライダ・アスマン（[1999]2007: 第六章参照）が提起した蓄積的記憶と機能的記憶を循環させる構築的な実践という考え方を応用することで、取材を通じて出来事の体験者の語りを聞き取り、それをニュース・テキストに反映することで文化的記憶へと変容させる構築的

な実践の担い手として、ジャーナリストを理解することが可能になった。

とりわけジャーナリストによるインタビューは、体験者との「語る－聞く」という相互作用によって支配的な記憶に回収されない語りを構築する実践である。この議論を深めるために、ライフストーリー論の中で提唱されてきた対話的構築主義アプローチに立脚し、「語り手」と「聞き手」の相互作用の分析を試みた（桜井 2002 参照）。対話的構築主義は語り手だけでなく聞き手の主体性にも着目するアプローチであり、ライフストーリーを語り手と聞き手が〈いま－ここ〉で語り合うことで構築されるものと捉える。さらに近年のライフストーリー論では、インタビューの「聞き手」が経験の積み重ねによって、体験者とともに主体的に記憶の構築に携わる「記憶の当事者」になることが論じられてきた（高山 2016 など）。このライフストーリー論の知見をジャーナリズム論に応用し、ジャーナリストを構築的な実践の担い手であり、「記憶の当事者」になる存在とみなす視点を提示した。さらにコメモラティブ・ジャーナリズム論と接合することで、現在主義に立脚するジャーナリストが、「稀有な機会」であるコメモレイションを起点に主体的に記憶を構築する担い手になることを指摘した。

第一部の分析によって、コメモレイションやアニバーサリーをジャーナリズム実践に即して捉えることが可能になった。ニュースメディアに規定されたジャーナリズム実践は、コメモレイションを祝祭的に報じることで特定の国民的記憶を構築している。さらにジャーナリズム実践が積み重なることで、コメモレイションに「象徴的なオーラ」が付与されていき、記憶が結晶化したコメモレイションが形成される。一方でコメモレイションをきっかけに、ジャーナリストは体験者の語りの構築に「聞き手」として関わっていき、さらに「記憶の当事者」になっていく存在である。ジャーナリズム実践による集合的記憶の構築過程は、この二つの方向性から理解する必要がある。

第二部：ジャーナリズム実践によるアジア・太平洋戦争の記憶の構築

第四章：構築的な実践の担い手としてのジャーナリスト

第四章ではアジア・太平洋戦争の記憶を規定する「長い戦後（long postwar）」

(Harootunian 2000: 716-719) という枠組みに着目した。「長い戦後」とは「新しい日本」の「繁栄」を称賛する記憶の枠組みであり、その前提となるアジア・太平洋戦争は「荒廃／復興」の記憶として構築される。この枠組みの成り立ちを検討したキャロル・グラック ([1995]2007: 324-330 参照) は、「神話的历史としての戦後」・「戦前の逆としての戦後」・「冷戦としての戦後」・「進歩派的戦後」・「中流階級の戦後」が相互に絡まり合う中で、1945 年 8 月 15 日から現在までを時空間的に連続した「新しい日本」とみなす国民的な記憶の枠組みが完成したと述べる。

この枠組みに規定されたジャーナリズム実践は「八月ジャーナリズム」と呼ばれる。佐藤卓己 ([2005]2014: 125 参照) が指摘するように、1955 年から 1956 年にかけての「終戦一〇周年特集」という「新たな伝統」を端緒とする「八月ジャーナリズム」によって、アジア・太平洋戦争の記憶が「八月六日の被爆体験に始まり八月一五日の玉音体験に終わる『国民的記憶』」として編成された。時代の経過とともに「八月ジャーナリズム」は「戦争回顧」の「伝統行事」として定着し (佐藤 [2005]2014: 139)、「記憶の五五年体制」の維持と浸透に貢献してきた。「終戦一〇周年特集」から始まる「八月ジャーナリズム」の中でも、特に重要な年が「戦後 50 年」にあたる 1995 年である。「戦後 50 年」は、生存する戦争体験者が自らの「体験」を「証言」する時代の終わりと、「戦争経験をもたぬ者たちが互いに戦争を論じ合い、『記憶』の次元での議論と対抗をつくり出す」時代の始まりに挟まれていた (成田 [2010] 2020: 322-323 参照)。このアニバーサリーを「八月ジャーナリズム」は大々的に扱い、1945 年 8 月 15 日に立ち上がった「新しい日本」が「繁栄」を成し遂げたことを賞賛するとともに、その「繁栄」が終わりを迎えつつあることへの「不安」や危機感を表明するニュースを数多く生産した。この制度的なジャーナリズム実践が確立していく過程を、ニュース・テキストだけでなく筆者によるニュースメディアに所属するジャーナリストへのインタビューを通じて明らかにした。

一方で「八月ジャーナリズム」はジャーナリストが「記憶の当事者」になっていくきっかけにもなる。第四章の後半では、筆者が聞き取った二人のジャーナリストのライフストーリーを分析することで、ジャーナリストがアニバーサリーを端緒に体験者との相互作用を経験し、一般的なニュースの生産を超えたジャーナリズム実践に従事していく様子を明らかにした。現在主義に立脚するジャーナリストがアジア・太平洋戦争の記憶に関心を向ける「稀有な機会」としての「八月ジャーナリズム」は、「荒廃／復興」という物語に沿った記憶をニュースとして生産する制度的な制約になる。一方で「八月ジャーナリズム」を起点に、

ジャーナリストは戦争体験者との対話的な相互作用による記憶の構築的な実践の担い手になるだけでなく、「記憶の当事者」になっていくアニバーサリー・ジャーナリズムの典型例である「八月ジャーナリズム」は、この二つの側面の重なり合ったものとして理解する必要がある。

第五章：ジャーナリズム実践による特攻の記憶の構築

第四章の包括的な議論を基礎に、第五章以降では「長い戦後」に規定された「八月ジャーナリズム」による想起と忘却、さらにアニバーサリーをきっかけにジャーナリストが構築的な実践に従事していくことについて具体的に検討した。第五章では「八月ジャーナリズム」によって構築される特攻の記憶を取り上げた。近年の特攻の記憶に関する研究によって、特攻のメディア表象の歴史的な変遷や、現代社会における特徴的な受容のされ方が批判的に分析され、人々の「情動」に訴えかけて「号泣」させる特攻が、他のアジア・太平洋戦争の記憶と比較しても、日本社会で広範に受け入れられたメディア記憶になっていることが論じられてきた（福間 2007; 中村 2017; 井上 2019 など）。しかし従来のメディア論的アプローチはテキストを生産する実践の分析には積極的に踏み込んでおらず、現代のジャーナリズム実践が特攻の記憶を対象化する理由を明らかにしにくかった。そこで第五章では、ニュースメディアも特攻の記憶を盛んに報道している現状を鑑みて、「八月ジャーナリズム」が批判的な視点を交えつつも「長い戦後」に沿った特攻の記憶を構築していることを明らかにした。

まず『読売新聞』・NHK・『朝日新聞』・『産経新聞』の具体的なテキストを分析し、特攻の記憶が「無謀な戦術」をシステム化した上層部の責任を批判するか、「必死」の作戦の犠牲になった若い特攻隊員の「悲劇」や「自己犠牲」を悼むかの比重の違いに基づいて表象される現状を指摘した。この両極のグラデーションの中で構築される特攻の記憶は、「悲劇」の対象を「前途ある国民」に限定し、その外部の存在を不可視化する。この不可視化の典型例が「フィリピン」や「マニラ」である。第五章では以下のような具体的なニュース・テキストを提示した。

大西（筆者注：瀧治郎）は米内光政海相に、「特攻を行って、フィリピンを最後の戦いと

したい」と言い残し、マニラに赴任した。大西は、第一神風特別攻撃隊を編成、(筆者注：1944 年) 10 月 25 日、関行男大尉を指揮官とする 13 人の攻撃隊が、敵機動部隊に突入した。フィリピン決戦は 45 年 1 月まで続き、航空特攻による戦死者は約 700 人に上った(『読売新聞』2006-08-13)。

このテキストでは、関のような優秀なパイロットを体当たり攻撃で失ったことや、その後の作戦によって戦死者が急増したことが指摘され、後続の部分で特攻を開始した上層部の判断が批判的に考察される。しかし繰り返し登場する「フィリピン」や「マニラ」は軍事的な言葉で表象される一方で、そこでの住民の「被害」は不可視化されている。戦況の悪化とともに拡大したことで「前途ある若者」の命を失わせた特攻は、「新しい日本」に至る「荒廃／復興」としてアジア・太平洋戦争を想起する「長い戦後」に適合する。こうした想起の一方で、フィリピンやマニラは「決戦」や「敗走」といった軍事的な言葉で表現され、そこでの住民の「被害」の記憶は立ち上がらない。このように構築される特攻の記憶は、「長い戦後」に規定された「八月ジャーナリズム」の代表例の一つと言える。

さらに第五章ではニュースメディアによる特攻の記憶の構築を支えるものとして、ジャーナリズム実践と知覧の相互作用を検討した。知覧特攻平和会館を中心とする知覧は、批判的な立場や意見も取り込みながら特攻の記憶が結晶化した「記憶の場」になっている。そしてジャーナリストも語り部と学芸員という二つの機能を共存させる知覧に依拠しながら特攻を論じており、結果的にニュース文化の中での知覧の特権性が確立していく。ここでは筆者のインタビューの成果を用いて、ジャーナリズム実践と知覧の相互作用によって「長い戦後」に適合した特攻の記憶が構築される現状を明らかにした。

第六章：ジャーナリズム実践によって構築されない記憶としてのマニラ市街戦

特攻の記憶のように「長い戦後」に適合的なものが「八月ジャーナリズム」によって構築される一方で、軍事的な言葉で表象されるフィリピンやマニラの人々の「被害」は忘却されてきた。第六章ではマニラ市街戦の記憶を取り上げ、日本のニュース文化における忘却のメカニズムに関する知見を得た。マニラ市街戦はアジア・太平洋地域では「最大」の市街戦であり、その「最大の犠牲者」は約 10 万人が死亡したマニラ市民だった(中野 2016)。ただ

し単語としてはニュース・テキストに繰り返し出現し、日本軍の加害責任が大きいにも関わらず、日本のニュースメディアはマニラ市街戦に関するニュースを生産してこなかった。第六章では、1950年代のニュース文化の中ではフィリピンが「対日批判の急先鋒」に位置づけられ、そこでは日本によるフィリピンへの「謝罪」や「賠償」の重要性が語られてきたものの、「お詫び」と「厚意」の「互惠関係」（中野 [2005]2015）と呼ばれる日本とフィリピンの外交関係の改善によって、1970年代以降の日本のニュースメディアはフィリピンを「支援」や「援助」の対象に位置付けるようになり、フィリピンの「怒り」の主たる原因であるマニラ市街戦が忘却されたことを論じた。

この忘却に変化が生じるのが、2016年の平成の天皇の「慰霊の旅」と「おことば」である。天皇がフィリピンへの「慰霊の旅」の出発にあたって、「フィリピンでは、先の戦争において、フィリピン人、米国人、日本人の多くの命が失われました。中でもマニラの市街戦においては、膨大な数に及ぶ無辜のフィリピン市民が犠牲になりました」と述べたことで、ジャーナリストはマニラ市街戦に「気づき」、「慰霊の旅」の期間中にニュースを積極的に生み出した。しかし、具体的なマニラ市民の被害に触れるものは少なく、さらに「慰霊の旅」の以後にもニュースの生産が継続することはなかった。

これはマニラ市に拠点を置く邦字新聞の『まにら新聞』が構築するマニラ市街戦の記憶と比較すると大きな差異がある。第六章では『まにら新聞』の具体的な記事の分析を通じて、マニラでは現在でも市街戦の記憶が問題として立ち上がっていることを指摘した。とりわけ市街戦が行われた2月から3月にかけて記事が顕著に増加し、「マニラ戦記念慰霊祭」を中心に多角的な報道がなされている。また現在でもマニラでは不発弾が発見されたり、行方不明になっていた遺骨が回収されたりすることで、マニラ市街戦の記憶が絶えず構築され続けている。

さらに第六章ではジャーナリストへのインタビューを通じて、日本のニュース文化の中でマニラ市街戦の記憶を構築する難しさを論じた。具体的には「長い戦後」の枠組みのもとで生産されるニュースがフィリピンやマニラを軍事的な言葉で表象し続けてきたこと、日本のニュース文化が想定するアジア・太平洋戦争の記憶が8月を中心に時間的に限定されているため、2月に起こったマニラ市街戦が報じられにくいこと、そして「お詫び」と「厚意」の「互惠関係」を進展させてきた日比両政府が外交問題になりそうな記憶の芽を事前に摘み取ってきたことで、日本のジャーナリストが記憶を報じるきっかけを掴みにくいことを挙げた。「長い戦後」に規定された「八月ジャーナリズム」は、「荒廃／復興」の記憶とし

てアジア・太平洋戦争を想起し、その文脈の中で特攻の記憶は繰り返しニュースとして構築されてきた。一方でマニラ市街戦は忘却され、「慰霊の旅」を経ても状況が変化することはないなかった。

第七章：インタビュー実践による戦争体験者の語りの構築

第五章と第六章では、「八月ジャーナリズム」という組織的な実践に基づくアジア・太平洋戦争の記憶の構築過程を具体的に議論した。しかし「八月ジャーナリズム」に規定されながらも、ジャーナリストは戦争体験者にインタビューをすることで、「長い戦後」に回収されない語りを構築する担い手になる。そこで第七章では NHK 戦争証言アーカイブスを利用して、NHK の記者による体験者へのインタビュー実践による、体験の語りの構築過程を分析した。そもそも刹那的な「いま」を追いかける「フロー」の志向性を有する日本のニュースメディアの中で（水島 2009: 16）、アーカイブの思想に立脚する傾向は強くなく、とりわけジャーナリストのインタビュー実践を可能な限り公開している NHK 戦争証言アーカイブスは稀有なコンテンツである。このデジタル・アーカイブを用いることで、取材時のインタビューにおいてジャーナリストが聞き手として構築的な実践に従事していることが明らかになる。

第七章では、元特攻隊員の角田和男¹の語りを分析した。まず実際に放送された番組を分析することで、角田が特攻の実施から拡大までを説明する役割を与えられていたことを示した。しかし角田はインタビューの中で日中戦争に従軍した時の体験も語っており、青島や重慶といった地で生じた疑問が日中戦争およびアジア・太平洋戦争を「正しい戦争」とみなす考え方への疑念につながったことが明かされる。角田の語りには、元特攻隊員のライフストーリーが「長い戦後」に沿った特攻の記憶を内破する可能性が示されており、NHK の記者の質問やあいづちといった構築的な実践が角田の語りを引き出す重要な要素になっていることが明らかになった。

¹ 「角田和男：特攻の目的は戦果にあらず」NHK 戦争証言アーカイブスより（2024 年 9 月 4 日取得、https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001100784_00000）。

またフィリピン戦線に従軍した遠藤仁次²と萩原金四郎³の語りは、フィリピン戦線を日米の戦闘とみなす視点の狭隘さを明らかにする。両者は日本軍がアメリカ軍と戦ったというよりも、「フィリピン人」と戦ったことを繰り返し述べており、こうした語りによって「フィリピン」の被害を前景化させたドキュメンタリーが制作された。さらに萩原の語りは具体的な加害の記憶を顕在化させており、元日本軍兵士の戦場体験の語りによって不可視化されてきたフィリピン戦線の記憶が立ち上がる可能性を示唆する。遠藤・萩原の語りも NHK の記者との相互作用によって構築されたものであり、その意味でジャーナリストは記憶の〈発掘〉や構築の担い手である。戦争証言アーカイブに保存されたインタビュー動画の分析を通じて、記憶を顕在化させる構築的な実践に従事するジャーナリストという位置づけを明確にした。

第二部の分析によって、アジア・太平洋戦争の記憶の構築過程を二つの方向性から議論する方途が示された。一つ目は「八月ジャーナリズム」によって「長い戦後」に規定された想起と忘却が推し進められること、二つ目は「八月ジャーナリズム」を起点とするジャーナリストのインタビュー実践が「長い戦後」に回収されない語りを構築するだけでなく、その経験によって「記憶の当事者」になっていくことである。この二つの方向性からアジア・太平洋戦争の記憶の構築過程を明らかにすることで、ジャーナリズム実践論を実証的に深化させることができた。

参考文献

- ・Allan, S. (2010) *News Culture*, 3rd edition, McGraw-Hill Education.
- ・アスマン・アライダ ([1999]2007)『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳、水声社。
- ・クドリー・ニック ([2012]2018)『メディア・社会・世界：デジタルメディアと社会理論』山腰修三監訳、慶應義塾大学出版会。

² 「遠藤仁次：絶対に話せないことがある」NHK 戦争証言アーカイブスより（2024 年 9 月 4 日取得、https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001100611_00000）。

³ 「萩原金四郎：戦争は人殺しだ」NHK 戦争証言アーカイブスより（2024 年 9 月 4 日取得、https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001100613_00000）。

- ・ Edy, J. A. (1999) ‘Journalistic Uses of Collective Memory’, *Journal of Communication*, 49(2), pp.71-85.
- ・ Erll, A. (2008) ‘Cultural Memory Studies: An Introduction’, A. Erll and A. Nünning (eds.), *Cultural Memory Studies: An International and Interdisciplinary Handbook*, Walter de Gruyter, pp.1-15.
- ・ 福間良明（2007）『殉国と反逆：「特攻」の語りの戦後史』青弓社。
- ・ グラック・キャロル（[1995]2007）「戦後五〇年：記憶の地平」梅崎透訳『歴史で考える』岩波書店、320-348頁。
- ・ アルヴァックス・モーリス（[1925]2018）『記憶の社会的枠組み』鈴木智之訳、青弓社。
- ・ アルヴァックス・モーリス（[1950]1989）『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社。
- ・ Harootunian, H. D. (2000) ‘Japan’s Long Postwar: The Trick of Memory and the Ruse of History’, *The South Atlantic Quarterly*, 99(4), 715-739.
- ・ Huyssen, A. (1995) *Twilight Memories: Marking Time in a Culture of Amnesia*, Routledge.
- ・ 井上義和（2019）『未来の戦死に向き合うためのノート』創元社。
- ・ Kitch, C. (2002) ‘Anniversary Journalism, Collective Memory, and the Cultural Authority to Tell the Story of the American Past’, *The Journal of Popular Culture*, 36, pp.44-67.
- ・ Meyers, O. (2021) ‘The Critical Potential of Commemorative Journalism’, *Journalism*, 22(7), pp.1682-1701.
- ・ 水島久光（2009）「放送アーカイブと新しい公共圏の可能性」『マス・コミュニケーション研究』75巻、15-34頁。
- ・ モーリス＝スズキ・テッサ（[2004]2014）『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』田代泰子訳、岩波書店。
- ・ 中村秀之（2017）『特攻隊映画の系譜学：敗戦日本の哀悼劇』岩波書店。
- ・ 中野聡（[2005]2015）「和解と忘却：戦争の記憶をめぐる日本・フィリピン関係の光と影（1）」WEB公開版、2024年9月3日閲覧、<http://nakanosatoshi.com/2016/01/02/%e5%92%8c%e8%a7%a3%e3%81%a8%e5%bf%98%e5%8d%b4%e2%80%95%e2%80%95%e6%88%a6%e4%ba%89%e3%81%ae%e8%a8%98%e6%86%b6%e3%82%92%e3%82%81%e3%81%90%e3%82%8b%e6%97%a5%e6%9c%ac%e3%83%bb%e3%83%95%e3%82%a3%e3%>

83%aa-2/。

・中野聡（2016）「マニラ戦の実像と記憶」WEB公開版、2024年9月3日取得、http://nakanosatoshi.com/2016/01/26/%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%83%A9%E5%B8%82%E8%A1%97%E6%88%A6%E2%94%80%E2%94%80%E3%81%9D%E3%81%AE%E7%9C%9F%E5%AE%9F%E3%81%A8%E8%A8%98%E6%86%B6%E2%94%80%E2%94%80%E7%BC%88web%E7%89%88%E7%BC%89/#_ftn2。

・成田龍一（[2010]2020）『「戦争経験」の戦後史：語られた体験／証言／記憶』岩波現代文庫。

・Neiger, M. et al. (2011) 'On Media Memory: Editors' Introduction', M. Neiger et al. (eds.), *On Media Memory: Collective Memory in a New Media Age*, Palgrave Macmillan, pp.1-24.

・ノラ・ピアール（[1984]2002）「記憶と歴史のはざまに」ピアール・ノラ編『記憶の場 1：対立』長井伸仁訳、岩波書店、29-56 頁。

・ノラ・ピアール（[1992]2003）「コメモラシオンの時代」ピアール・ノラ編『記憶の場 3：模索』工藤光訳、岩波書店、427-474 頁。

・桜井厚（2002）『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房。

・佐藤卓己（[2005]2014）『八月十五日の神話：終戦記念日のメディア学』増補、ちくま学芸文庫。

・Schudson, M. (1992) *Watergate in American Memory: How We Remember, Forget, and Reconstruct the Past*, Basic Books.

・Schudson, M. (2019) 'Approaches to the Sociology of News', J. Curran and D. Hesmondhalgh (eds.), *Media and Society*, 6th edition, Bloomsbury Publishing, pp.139-165.

・高山真（2016）『〈被爆者〉になる：変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』せりか書房。

・玉木明（1996）『ニュース報道の言語論』洋泉社。

・田辺繁治（2003）『生き方の人類学：実践とは何か』講談社現代新書。

・タックマン・ゲイ（[1978]1991）『ニュース社会学』鶴木眞・櫻内篤子訳、三嶺書房。

・Wertsch, J. V. (2002) *Voices of Collective Remembering*, Cambridge University Press.

・Zelizer, B. (1992) *Covering the Body: The Kennedy Assassination, the Media, and the*

Shaping of Collective Memory, The University of Chicago Press.

• Zelizer, B. (2021) 'Why Journalism's Default Neglect of Temporality is a Problem',
Media Culture & Society, 43(7), pp.1213-1229.